

**2020年12月20日・佐土原キリスト教会・クリスマス礼拝説教****聖書箇所：ルカ福音書2章8～20節****タイトル：救い主が生まれた**

クリスマス、おめでとうございます。今「ルカ2章8～20節」をお読み頂きました。1～7節にイエスが生まれたという記事があります。イエス様は、紀元前6年頃、ベツレヘムで生まれました。その時、その地方で羊の番をしながら野宿していた羊飼いの許に天使が現れます。羊飼いは恐れます。しかし主の使いは言います。「恐れることはありません…私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます…」(2:10～12)。天使は「すばらしい喜びを知らせ」ようとしたのです。では、クリスマスは、どんな喜びを語るのでしょうか。

まず、なぜ天使は羊飼いに現れたのか。ある本にこうありました。「真夜中に羊の番を仕事としなければならないような、当時の社会の底辺層の人々…。羊飼いは野宿を続け、体には獣の臭いがこびり付いています。また宗教の決まりを—(例えば「この日は出歩くな」という安息日を)—守ることが出来ません。それで人々からは「あの連中は神様から遠い連中だ」と言われ、自分達もそう思われていたのです。その彼らに喜びの知らせが告げられたのです。その意味で天使が告げる喜びは、どんな人にも語られる喜びなのです。だから天使は「この民全体のため(『全ての人』のため)の素晴らしい喜び」(10)だと言いました。この喜びの与えられない人はいないのです。だからこれは、私達にも語られている喜びなのです。

9節「主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた」(9)。彼らは「自分達は神に相応しくない」と思っていたから神を恐れたのです。日本人も後ろめたいことがあると「罰が当たる」と言って神を恐れます。でも私は、彼らの恐れは、色々なことを恐れながら生きている人間の姿を象徴していると思うのです。チューリップというバンドをご存知でしょうか。彼らの「もう笑わなくっちゃ」という歌の中に「人はみんな、何かに怯え、生きて行くのか、それが定めなら…」という歌詞があります。私達は皆、色々な不安や恐れを感じながら生きているのではないのでしょうか。子供さんが登校拒否になって、不安に襲われたお母さんが、子供を追い込んで行った、という話を読みました。不安や恐れは私達を様々に追い込んで行くのです。でも天使は言いました。「恐れなくて良い、私は喜びを告げに来ただ」。その喜びは「不安や恐れさえ追いやるような喜び」だと言うのです。では、繰り返しますが、その喜びとは何なのでしょう。イエス様の誕生が、どういう意味で喜びの知らせなのでしょう。

何度もお話ししますが、私は15年前のクリスマスの時期を総合病院の精神科病棟で迎えました。教会の働きをして行く中で「失敗した」と思うことがあって、自分が責められて、耐えられませんでした。そして、「これからどうなるのか」と恐れしました。自責の念と、恐れと、絶望のような思いが重なり、急性鬱症になりました。もらった病名は「希望なし」というもの

でした。生きる気力がない。10m が真面に歩けない。その鬱状態からどうやって回復したかと言うと、薬も効いて来たと思いますが、ある日、「今まで沢山の失敗をして来たけど、いつも神が助けて下さったな」と考えていたら、神の細い声が心に響いた気がしました。「私が何かをする」。私はそういう形で「恐れるな」という声を聞いたのです。それが希望になりました。「希望なし」の私に、希望が見えたのです。希望によって私は、廃人のような状態から快復したのです。

私は自分の拙い経験からも思うのです。私達は「1人で全てを抱えて恐れている」のではないのでしょうか。ある本にこんな文章がありました。「私たちの生活には、自分の努力ではどうにもならないこと、取り返しのつかないことなどがしばしば生じます。自分の能力で解決できないこともたくさんあるのです」。神にすぎるしかないことがあります。助けて欲しいことがあります。その時、神に希望を持つことが出来れば、神が何かをして下さると信じる事が出来れば—(ある人は「神は、悪からさえ善を生み出してくださる」と言いました。それを信じる事ができれば)—それは大きな救いではないのでしょうか。

それは、羊飼いや同じだったのではないのでしょうか。その彼らに天使が語ったのです。「救い主がお生まれになりました」。「救い主」、救い出してくれる者、守ってくれる者、助けてくれる者、命を与えてくれる者、そういう存在です。それは、ユダヤの人々にとっては「祝福の源である神の御手の中に入れてくれる者」という意味でした。しかもここで天使が讃美したのです。それは、神が喜ばれたということです。イエス様の誕生をまず喜ばれたのは、神様だったのです。それは、人々がイエス様を通して神様の御手の中に入り、神様の救いに与ることが出来るようになったからです。そのことを神が喜ばれたのです。どういことでしょうか。

神は、恐れを抱えた私達に神が必要だと知っておられたから、「旧約」の時代から「私があなたと共にいる」と言って来られたのです。「恐れるな、わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ 41:10)。「誰が傍らにいらなくても、神が共にいて下さり、最後は責任を取って下さる」と思うことが出来れば、慰めです、力です。いずれにしても、神は人と生きようとして来られました。

しかし問題が2つありました。1つは、人の側にそれが分からなかったことです。神が大き過ぎる方だから、人には神の思いが分かりませんでした。だから、むしろ神を恐れたのです。しかし、だからこそ神の子イエスは赤子として地上に来て下さったのです。考えれば恐ろしいことです。赤子は、お世話してもらわなければ死ぬしかない。でもそんな姿で人間の世界に入って下さったのです。それは赤子ならどんな人でも恐れなく近づくことが出来るからです。飼いや「みどりご」と聞いて「会いに行こう」と恐れることなく神に近づこうとしました。長じたイエスは「父の許を出て行き、他所の町で身を持ち崩しボロボロになって帰って来た息子を喜んで迎える父の話」を教えて下さいました。この父はボロボロの息子に走り寄るのです。私達が神様の方を向くこと待ち、私達に走り寄ろうとされる神様、イエス様によってそんな

神様の真実が分かるようになったのです。人が神に手を延ばそうとするようになったのです。

しかしもう 1 つの問題は、人には、人を神から隔てる仕切りがあったということです。ある時、イエスの許に姦淫の現場で捕まった女が連れて来られました。指導者達は石を振り上げて「こういう女は…石打ちですよ。あなたはどう思うのか」とイエス様に迫りました。イエスは言われました。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい」(7)。「聖書」は「年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された」(9)と語ります。「私には何の罪もない」と言える人はいなかった。それは私達も同じではないでしょうか。「人を憎むことは人の死を願うことと同じだ」とイエスは教えて下さいました。でも私達も人を憎むのではないのでしょうか。そんな罪ある私達と、聖い神様とは、本来一緒にいることは出来ないのです。私達の罪が神様との間を隔てるのです。しかし、だから神の御子は人となって地上に来て下さり、私達を神から隔てていた私達の罪の一切を、その身に背負って、十字架上で始末して下さいました。イエスは、私達と神様との間の仕切りを取り除いて、神様との間に橋を架けて下さったのです。それによって私達は、神の御手の中に入ることが出来て、神と共に生きて行けるようになったのです。

神様はずっと、私達を助けたい、救いに与って欲しい、と願って来られたのです。それがイエス様の誕生で現実になったのです。だから、誰よりもまず、神が喜ばれたのです。私達は、神の救いに与ることが出来るようになったのです。

ある方のお兄さんが交通事故に遭って、10 年間、寝たきりの状態で回復しなかったのです。ご家族、特にお母さんにとって絶望的な苦しい時でした。しかし 10 年経って快復が始まり、やがて普通の生活が出来るようになりました。後にお母さんが言われたそうです。「あの絶望的な状況で、なぜが『きっとこの子は良くなる』という希望が与えられて、それであるところを通過して来る事が出来た。そうでなければとても通過して来る事は出来なかった。私は神様に背負われていたんだね」。神様が私達を背負って歩いて下さるようになったのです。昨年、来て下さった佐藤彰先生はこう言っておられます。「神の御手の中にいる、その希望があるから我慢出来ます。希望があるから待つことも出来ます。希望があるから私達は諦めません、希望があるから挫折することは出来ない」。先生はまた、ご自分の苦しみの経験から「神の奇跡はある」と語っておられます。神の御手に入ること、それは神の恵みと、神から来る希望によって支えられ、神様に生かされて生きることが出来るということです。

しかし、それだけではありません。イエスは十字架に架かって身代わりに死なれましたが、3 日目に甦られたのです。そして「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」(ヨハネ 11:25)と言われました。イエスを通して神に迎えられた者は「天国で永遠に生きる」という約束をして下さったのです。私達は必ず死にます。今年、私達も 3 人の方を天にお送りしました。しかし神の御手の中に入るといことは、たとえ地上の命が終わろうとも、御手に抱かれて天国に凱旋出来るということです。カナダである方の葬儀の司式をしている最中にふと会堂の天井を見上げた時、その方を天に運ばれる神の腕が見え

た気がしました。私は圧倒されました。子供を亡くされて「神なんかいない」と言って過ぎて来られた方が、末期ガンでキリスト教病院に入院し、亡くなる前に洗礼を受けてクリスチャンになりました。亡くなる時、「道が見える、天国への道だ」と言って亡くなられたのです。DL ムーディーという伝道者は亡くなる時に叫びました。「今、私はあまりにも美しい光景を見ている。これが死だったらあまりにも素晴らしい。神が私を呼んでおられる。私は行かなければならない」。私達は、死にさえ希望を持って向かうことが出来るようになったのです。「救い主が生まれた」という知らせは、「あなたも神様の御手の中に入ることが出来るようになった、神と共に生きて行けるようになった」という知らせであり、それは私達にとって、生きるにも、死ぬにも—(静かなものかも知れない、しかし)—素晴らしい喜びの知らせなのです。

さて、羊飼いが天使のメッセージをどれだけ受け止めたのか、それは分かりません。でも「神が自分達に関わろうとして下さっている、自分達も神様に望みを置いて生きて行けるようになったのだ」、それは感じたのではないのでしょうか。だからベツレヘムに急いだのです。そして「布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけ…」た時、「本当だった」と喜んだのです。その後、彼らの生活は、特に何が変わったわけでもないでしょう。でも、彼らは、救い主が来て下さった、今からは御手の中で神様に望みを置いて生きて行ける、その喜びに生かされて行くのです。

生きるにも、死ぬにも、神様が私に責任を持って下さるようになった、私の前にも天国の門が開かれた、このクリスマスのメッセージを感謝して、イエス様のご降誕を心からお祝いしたいと思います。